

きたばたけ ちかふさ とうごくけいはい
第18話 北畠親房の東国経営

朝廷では改めて勢力挽回の策を立てられたが、わけても東国の経営に重きを置かれる。北畠親房は常陸に在って後醍醐天皇の崩御を聞いて大いに落胆したが、その後も一意官軍の振興に力める。しかし、思うようにならなくて吉野に帰る。

ちやうてい とうごくけいはいさく
朝廷の東国経営策

一方、吉野の朝廷では、曩に顕家を失い、頼信の守った男山をも攻略されて、今はただこれのみを頼みとしていた新田義貞もまた戦死したのですから、後醍醐天皇の失望は申すに及ばず、将士らも皆落胆した。しかし、そのお志は少しも挫かれなかった。やがて勢力挽回の策を改めてたてられ、義貞が戦死した月には、早くも北畠顕信を陸奥介鎮守府将軍に任じ、義良親王を奉じて奥州に赴かせることにした。兄の顕家の後を継いで、奥羽地方を鎮め、並びに東国の官軍を総べさせることにされたのです。

按いますに、近畿の官軍は殆ど全く勢いを失ったので、暫く京都の回復の計画を捨てて、先づは東国から奥羽地方に官軍の勢力を養い、足利氏の根拠地である東国を平らげて後に、徐ろに政権の回復を図ろうとなされたのでしょう。この時、義良親王を皇太子にお立てになることを内定され、顕信の父の北畠親房にも勅りして、結城宗広らと共に親王に従って東国に下らせたのを見ても、いかに吉野の朝廷が東国を重く見ていたかが分かります。

又、この時、新田義興、北條時行らに関東を下して、兵を集めて親王に力を添えました。

えんしゅうなだ ふうは
遠州灘の風波

しかし、陸路は皆賊軍に差し塞がれて逆も通れそうになかったので、一同は伊勢の大湊 - 今の宇治山田市の北方 -- に集まり、9月の初めに多くの兵船に乗って出発しました。ところが、遠州灘にかかった頃に、俄かに大風が起こって、逆巻く大波に船は木の葉の如くに漂わされ、忽ち四方に吹流されて、ちりぢりばらばらになった。義良親王のお船も一時は漫々たる大洋に吹き放たれて、今にも覆りそうでしたが、急に風が変わって伊勢の篠島に吹き戻された。又、この一行に加わっておられた宗良親王および尊良親王の御子の守永王は、遠江の白羽港に着かれて井伊城に入られたが、親房の船は遙かに遠く常陸の東條浦に漂着しました。

義良親王の船には北畠顕信も結城宗広もお供していたので、伊勢に吹き戻されると、再び奥州に下る準備に取りかかられたのですが、間もなく宗広は病気に罹って没し、準備もはかばかしく出来なかったと見えて、翌延元4年の3月、義良親王は顕信と共に吉野に引き返された。

ゆうきむねひろ
結城宗広

この時、思いを残して死んだ結城宗広の最後は、実に悲壯を極めたものだったと伝えられる。

彼は奥州白河の豪族で、南朝方の大忠臣の一人でしたが、こ
 でいよいよ病気に斃れなければならなくなった事を知ると、いかに
 残念だったのか、臨終の床からがばっと跳ね起き、ふるえる声で、
 遥かに白河城にいる子の親朝に遺訓を残した。

「自分はもう70才にも近くなって、この世に思い残す事はな
 にもないが、ただ朝敵を亡ぼすことが出来ずに死ぬのが残念であ
 る。若し、わが後生を弔おうと思えば、仏事や読経などはせず
 に、ただ朝敵の首を取って、わが墓の前に懸け並べてみせてくれ
 と、これを子の親朝に伝えるようにと言ひ残すと、刀を抜いて逆手
 に持ち、歯嚙みをして死んだというのです。今、津市に在る別格
 官幣社 結城神社は即ち結城宗広を祀った社です。



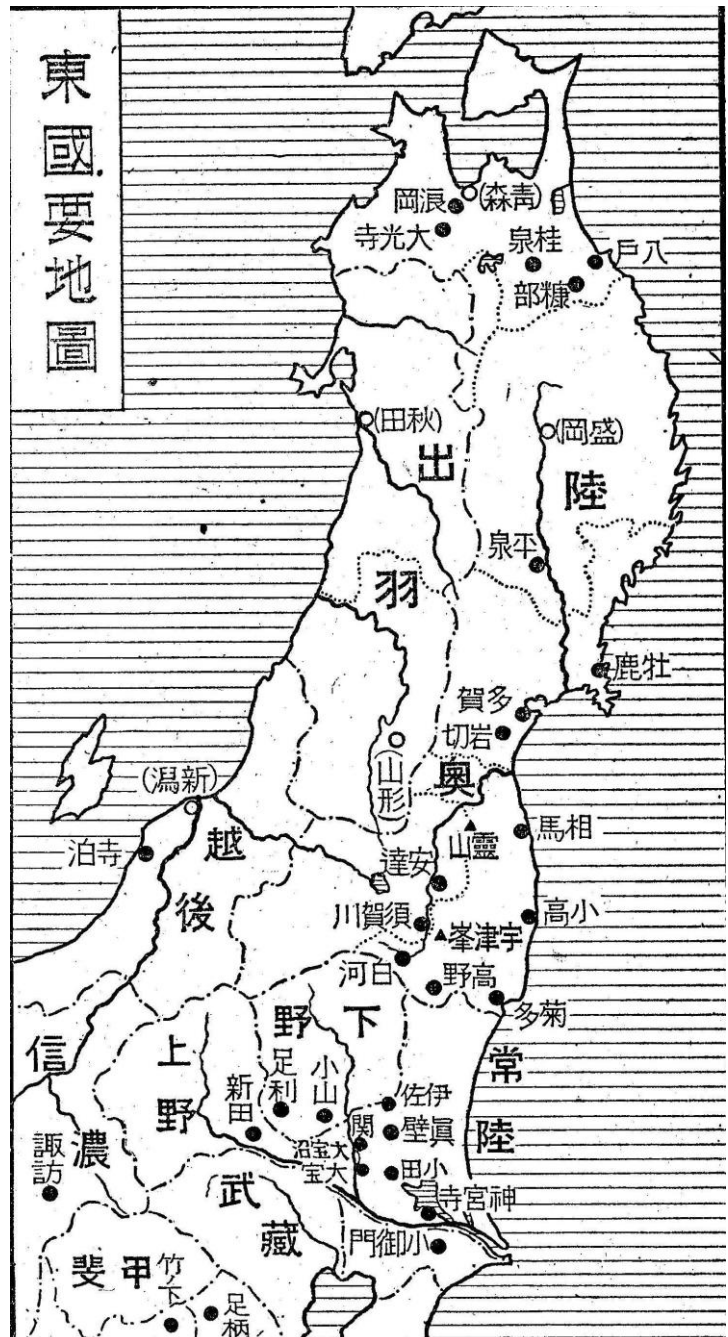
伊勢市 光明寺 結城宗広の墓

さて、常陸の東條浦に着いた北畠親房は、
 先づ小田治久らの神宮寺城に入ったが、間もな
 く賊軍に攻め落とされて阿波崎城に移り、そこ
 でまた敗れて、10月には、小田治久の居城で
 ある筑波山の麓の小田城に入った。

このころから常陸の官軍の勢力は漸く振
 るい、伊佐城の伊佐太郎を始め、関城の関宗
 祐、宗政の父子、大宝城の下妻政泰らも皆親房
 に応じた。

11月の初めになって、義良親王の船は伊勢
 に吹戻されて、再び出発の準備にとりかかった
 という知らせが常陸に達した。親房はこれを
 聞くと、親王の御下向に先立ち、進んで奥州に
 向おうと考えたが、その通路は悉く賊軍に差
 し塞がれていたため、彼は先づ白河の結城親朝
 に書面を送って、奥州の方から打って出て、常
 陸と奥州との通路を開くようにと乞うた。

ところがこの親朝は、父の宗広の忠義一途
 なのとちがい、利害の関係を頭に置いてかかっ
 たので、このごろの天下の形勢が、とかく官軍



によくないのを見て、容易には親房の求めに^{ちかふさ} 応ぜず、いつまでも曖昧な態度^{あいまい たいど と}を執っていた。

こうして延元^{えんげん} 3年^{とつぜん}も暮れて4年^{かんぐん と}となったが、その秋^とになって、突然、官軍^{ようい}に取って容易^{じけん}ならぬ事件^とが起きた。それは後醍醐天皇^{ごだいご}がお崩れ^{かく}になった事^とです。

後醍醐天皇の崩御^{ごだいご ほうぎよ}

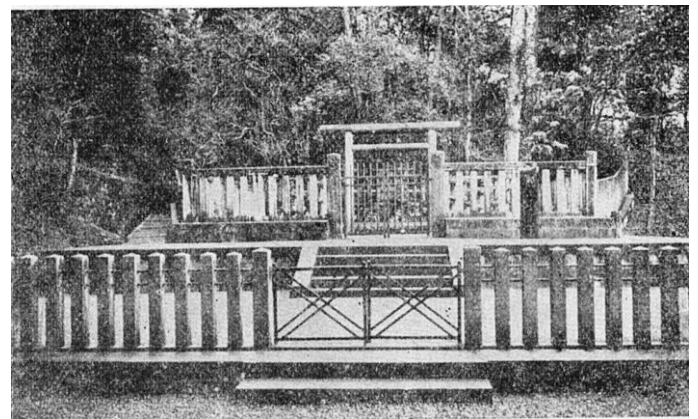
天皇^{えんげん}は延元元年^{うつ}12月に吉野^{あんぐう}に遷られてから既に3年の月日^{あんぐう}を行宮^{あんぐう}に過^{あんぐう}ごされたのですが、その間に、皇太子^{つねなが}恒良親王^{たかなが なりなが}を始め、尊良^{うしな}、成良^{こう}の2親王^{たの}をも喪^{ぶしん}われて、股肱^{よしだ}と頼^{よしだ}まれた武臣^{よしだ}の新田義貞^{よしだ}も北畠^{あきいえ}顕家^{せんし}も戦死^{ぶんしん}し、また、文臣^{ぶんしん}の内大臣^{よしだ}吉田定房^{ださだふさ}や右大辨^{うだいべん}藤原清忠^{ふじわらきよただ}らも既に^{すで}に薨^{こう}じたので、どんなにか心^{こころ}細^{ほそ}くおぼしめして、ある時^{ぎよせい}の御製^{ぎよせい}にも、

事^{こと}問^とわん人^{ひと}さえ稀^{まれ}になり^{なり}にけり 我^わが世^よの末^{すえ}ぞ思^{おも}い知^しらるる

と詠^よまれたほどでした。それやこれやで御心^{こころ}を痛^{いた}められたのでしょ、延元四年^{にわか}8月^{にわか}9日^{にわか}、俄^{にわか}かにご病^{びよう}気に罹^からせられて、日^ひに日^ひに重^{おも}くなられるばかりでしたが、その15日^{のりなが}に皇太子^{みくらい}義良親王^{ゆづ}に御位^{みくらい}を譲^{ゆづ}られ、その翌^{かく}16日^{かく}についに御年^{かく}52才^{かく}でお崩^{かく}れになった。

北面の塔尾陵^{ほくめん とうのおのりょう}

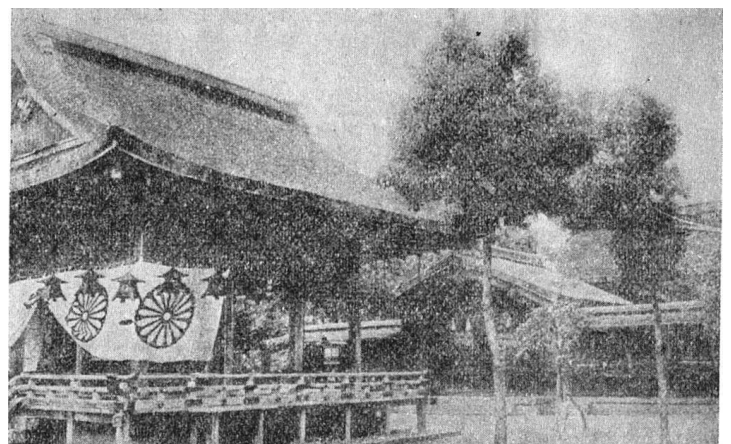
思^{たかとき}えばご在^{たかうじ}位^{たかうじ}22年^{たかうじ}の間、北條高時^{たかとき}、足利尊氏^{たかうじ}らの逆賊^{たかうじ}のために常^{いた}に御心^{こころ}を痛^{こころ}められ、皇居^{てんてん}をも転々^{てんてん}とかえられて、王政^{おうせい}復古^{ふこ}の理想^{りそう}を成^{じよう}就^{じゆ}なさろうとしたが、ついにそのお志^{こころ}を遂^とげずにお崩^{かくれ}れになったのですから、いかに御無念^{むねん}におぼしめしたでしよう。



奈良 吉野町 塔尾御陵^{とうのおのりょう}

ご臨終^{りんじゆう}に際^{さい}してまで、朝敵^{ちようてき}を悉^{ことごと}く亡^{ほろ}ぼして天下^{てんか}を泰平^{たいへい}にすることの叶^{かな}わなかつたのを心^{こころ}残^{のこ}りになされ、「よしや身^みは南山^{なんざん}の苔^{こけ}に埋^{うづ}もるとも、魂魄^{こんぱく}は常^{つね}に北関^{ほくけつ}の天^{てん}を望^{のぞ}まん」と仰^{おほ}せられて、思^{おも}いを京^{きよう}と都^との空^{そら}に残^{のこ}されました。

左^{ひだり}の御手^てに法華經^{ほつげきやう}の五^{かん}の巻^もを持たれて、右^{みぎ}の御手^てには御劍^{ぎよけん}をお持^かちになつたま^まお崩^{かくれ}れになったので、その御遺言^{ゆいごん}に任^{まか}せて、吉野山^{ふもと}の麓^{ふもと}にそのまま北向^{きたむ}きに葬^{ほうむ}り奉^{たてまつ}った。塔尾^{とうのおの}陵^{りょう}がこれ^{あと}で、後^{あと}に述^{くす}べる楠木正行^{きまさつら}の事蹟^{じせき}で有名^{ゆうめい}な如意輪堂^{にょいりんどう}の後ろ^{うし}に在^あります。



奈良 吉野町 吉野神宮^{よしのじんぐう}

また、天皇^{えんぐう}が吉野^{よしみづいん}に遷^{そうぼう}られた時に、初めて行宮^{あんぐう}となされたのは吉水院^{よしみづいん}という僧坊^{そうぼう}でした

が、これは今も昔のままに残^{よしみづ}って、吉水神社^{かいしやう}と改称^{かいしやう}されている。その時^{ぎよくざ}の玉座^まの間^まというのも残^まって

いる。

なお、天皇を祀る社まつ やしろは官幣大社かんべいたいしゃ吉野神宮よしのと申してこの吉水神社よしみづから約3kmほど下したの方に在ります。

当時の勤王軍

さて義良親王のりながは御年12才ごむらかみでお立ちになって、第97代後村上天皇ごむらかみとなられた。この時、遠江とおとうみには宗良親王むねなが、駿河するがには護良親王もりながの御子の興良親王おきな、土佐とさには花園宮はなぞのみや、九州かねながには懷良親王かねなががおられた外に、上野こうつけには新田義興にったよしおき、武蔵むさしにはその弟の義宗よしむね、越前えちぜんには脇屋義助わきやよしすけとその子の義治よしはる、河内かわちには楠木正行くすのきまさつら及びその一族の和田氏わだ、恩地氏おんち、山陽さんようには児島こじま、桜山さくらやま、吉川きつかわの諸氏さんいん、山陰さんいんには名和氏なわ、三角氏みすみ、諸国とには土居氏どい、得能氏とくのう、紀伊きいには湯浅氏ゆあさ、美濃みのには根尾入道ねおのにゆうどう、尾張おわりには熱田大宮司あつただいぐうじ、伊勢いせ及び常陸方面ひたちには北畠氏きたばたけ、九州きくちには菊池まつうら、松浦くさか、草鹿やまが、山鹿ひとの諸氏きんのうがあって、斉しく勤王きんおうに心こころを尽つくしていたので、後醍醐天皇ごだいごがお崩れかくになっても、吉野の朝廷どうようは少しも動揺どうようするような事はなかった。

親房の落胆

とはいえ、常陸おだの小田城あに在しきって、頻りに奥州みちへの道ひらを開きたばたけちかふさこうとしていた北畠親房らくたんはどんなに落胆らくたんしたでしょう！ 遠く離れた東国の軍中とお はなで、程経とうごくてこの悲しい知らせぐんちゆうを受けた時の彼の心ほどへ中かなは察しするに余うりあります。殊あまに新帝ことの後村上天皇しんていは、まだご幼少ごむらかみの事ようしょうでもあれば、すぐにも吉野すけに帰すけってお輔すけけしたいと思じじょうったのですが、その時の事情じじょうが彼ひたちに常陸さを去ゆるることを許ゆるさなかったので、よんどころなく、遙かはるかに書面しょめんを吉野たてまつに奉せいって、政治上せいの事じじょうもいろいろと申し上げた。

神皇正統記

今も世じんのうしょうとうきに有名な『神皇正統記』は、この時、親房ちかふさが戦陣せんじんの間々あいだあいだに書ごむらかみいて、後村上天皇たてまつに奉たてまつったものの1つです。親房ちかふさは朝廷なげが二つに分かれて、官軍あまと賊軍あまとがいつまでも争あまっているのを歎あまき、天照あま大神あまから後村上天皇ごむらかみに至いたるまでの皇統こうとうの由来ゆらいを述のべて、大義名分たいぎめいぶんを明あきらかにしたのです。この書しよを見みると、我が国体わの万国こくたいに優ばんこくれている所以すぐも分ゆえんかり、皇位わの極めて尊こうい厳きわな所以そんげんも分ゆえんかり、吉野の朝廷わが正統せいとうである事わがはっきりと分しよくげんしょうかるのであります。彼はまた『職原抄』かんしよくという朝廷のの官職しよもつの事しよもつを述しよもつべた書物しよもつも著あらかして、天皇さんこうにご参考たてまつになさるようにと奉たてまつった。

結城親朝の二股

親房ちかふさはこうして遙かはるに吉野の朝廷せいへ政治せい上の意見じじょうを申いけん上げると共に、一方もうでは頻りに陸奥あへの路ともを開しきこうと努みちめたが、例れいの結城親朝ゆうきちかともがその中間ちゆうかんの白河しらかわに在あって、相変あいわらず曖昧あいまいな態度たいどを執とっていたので、その計画けいかくもはかばかしくは進すすまなかった。のみならず、延元4年10月たかうじには、尊氏ぶしょうの武将こうのもろふゆの高師冬たかうじが東国とうごくの軍勢ぐんせいを率ひきいて、鎌倉はっを発ほくじようして北上せし、常陸こうこくの官軍ちかふさを攻おだめて、その翌興国元年5月おだには親房ちかふさの小田城せまにも迫おだって来た。しかし、この時は城主おだの小田治久おだが親房ちかふさと共によく防ふせいだるので、賊軍やぶは敗しりぞれて退しりぞいた。

顕信、陸奥に下る

第18話 北畠親房の東国経営

けれども、親朝の態度がいつまでも曖昧なために、奥州への通路を開くことが出来ずに困っていると、この夏になって、北畠親房の子の顯信が陸奥守兼鎮守府將軍に任ぜられて吉野から下って来た。彼は伊勢から船で、常陸に上陸して小田城に入り、久しぶりに父の親房と逢って、今後の計画などをも相談してから。奥州に向って行った。ところが、多賀の国府はこの時、足利方の石塔秀慶が占領していたので、先づこれを攻めて奪い還さなければならない。それには援兵が要る。顯信もまた白河の親朝に向って出兵を促した。親朝はこれにも曖昧な態度を見せた。

常陸の官軍

そうこうしているうちに常陸の官軍はその勢いが次第に衰えて来た。興国2年6月、高師冬が大軍を以って小田城を囲んだ時には、さすがにこの城はよく防ぎ、また伊佐城、関城、大宝城なども固く守って動かなかったが、その他の官軍の城や砦は次第に陥れられ、小田城の城主治久も、遂に屈して敵に通じそうな様子が見えた。親房もこれには驚き、しばしば使いを親朝の許に馳せて、いよいよ事情の切迫した事を告げて援けを乞うたが、親朝は依然として曖昧な態度を執っていた。

興良親王

この夏、親房は興良親王を駿河から小田城にお迎えした。いうまでもなく、親王を奉じて士気を鼓舞すると共に、官軍の中心を作ろうとしたのです。しかし、すでに時機が遅かった。その11月に至って、小田城主小田治久は、ついに官軍が勢力を得そうにないのを見て変心し、高師冬の軍門に降ったので、親房は関宗祐の関城に移り、興良親王は下妻政泰の大宝城に移られた。大宝城と関城とは、筑波山の西12kmほどの所にある大宝沼の東南の岸と西北の岸とに沼に臨んで斜めに相対していました。

親房しきりに親朝を説く

十二月に、師冬は兵を率いて関城及び大宝城を囲み始めた。この時、官軍の守った城は、外にもまだ伊佐、真壁、中郡、及び下野の西明寺の4城があったが、賊軍にその間を差し塞がれて、互いに連絡することも出来ない。今はただ白河の親朝の援けを待つ外には全くどうしようも無くなった。親房は頻りに彼に書面を送って、或いは賺し、論し、奨め、或いは大義名分の上より論じ、尊氏の許すべからず逆賊である所以を説き、彼の父宗広の忠烈を繰り返してその遺訓に従うようにと勧めたが、それでも親朝は動かなかった。

翌興国3年2月、たまたま奥州の官軍は石塔秀慶を破ってこれを走らせ、大いに形勢を盛り返したので、顯信はその勢いに乗じて常陸の官軍を救おうと図り、親朝にも出兵を促したが、これにも彼は曖昧な態度を以って報いただけで、助力しようとはしなかった。

その後常陸では、下野の小山氏が迎えるままに、興良親王を小山にお送り申して、興国4年5月に更に尊良親王の御子守永王を吉野から関城にお迎えしたが、このころ、官軍の諸城はすでに糧食も乏しくなってその勢いは日に日に蹙まるばかりでしたので、親房はまたしても急使を結城親朝に送って援けを乞うた。

第18話 北畠親房の東国経営

ちかとも はいはん 親朝の背叛

然るに親朝はその年の6月10日、今までの曖昧な態度を棄てて、ついに公然と叛いて足利尊氏に
じたので、親房の最後の希望も絶えた。 ああ、忠烈を究めた結城宗広の子としてなんという親朝のあ
さましい根性だったろう！ 彼は無比の大忠臣の子でありながら、かくして大不忠の臣となると共に大
不孝の子となったのです。

せきじょう だいほうじょう かんらく 関城と大宝城の陥落

結城親朝が叛いて賊軍に荷担すると、官軍の援兵はもはや全くどこからも来る当てがなくなったので、
高師冬はその8月から船を大宝沼に浮かべて、水陸の両面から関、大宝の2城を囲んで攻めた。 城
兵はよく拒いだが、囲みを受けてからすでに3年にも及び、ついに1兵の援軍も来ない上に、今は2城
の間の交通さえも全く絶たれてしまったので、兵は疲れ、糧食も全く尽きて、遂に11月11、12日の
間に城は陥り、関宗助、宗政の父子も下妻政泰も討ち死にした。 守永王は遁れて陸奥に走って、顕信
の軍に入れ、親房は遁れて吉野に帰った。 次いで、伊佐城も陥り、常陸、下野の官軍はこれより全
く衰えた。

とうごく かんぐん おとろ 東国の官軍、衰える

北畠親房が最初に伊勢を発して常陸に上陸してから、関城が陥るまでに実に前後六年にわたっ
ている。 この長い年月の間、彼は東国の小城に小勢の身方を力に、よく官軍の勢力を支えたのだが、頼
みにしていた結城親朝が叛いて足利方となったので、遂に東国から奥羽地方にかけて官軍の勢力を大い
に養うという吉野出発以来の大目的を、達することができなかつたのです。 けれども、子の北畠顕信
はこの後もなお陸奥に在って官軍の中心となり、久しく相当な威力を振るっていました。

(第18話 北畠親房の東国経営 終わり。 次は前頁に戻り、第19話 四條畷の戦い)